アカデミック・ライティング教育の課題

－日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から

キーワード：アカデミック・ライティング、意見文、文章構造、段落

二通　信子

１．はじめに

近年、大学の学部段階での留学生の受入れが進むにしたがって、大学で必要な日本語力の養成、特に大学で必要とされる文章力を意味するアカデミック・ライティングの教育が、日本語教育における重要な課題になってきている。本稿では、日本人学生及び中国人・韓国人日本語学習者の意見文における文章構造を比較検討し、母語の違いによる意見の述べ方の特徴や文章構造上の問題について調べ、今後の文章表現指導の課題を明らかにすることを目的としている。なお、文章の「構造」と「構成」という用語の使い方について、本稿では文章作品として客観的に存在する文章の組み立てを「構造」、書き手が文章を書く過程での文章の組み立てを「構成」と区別して呼ぶことにする。

かつてKaplan(1966)は対照修辞学の立場から、異なる母語を持つ英語学習者の作文を分析し、言語別の修辞構造の類型化を行った。そして英語が結論に直線的に向かう修辞構造であるのに対し、日本人を含む東洋人の場合は結論の周囲をぐるぐる回る渦巻き型の修辞構造であると特徴づけた。Kaplanのこの指摘に対しては、その後様々な面から批判がなされているが（橋内1999 pp.50-51)、英語と日本語のこの修辞構造の違いについては、その後も英語教育の関係者をはじめ多くの人々から指摘されてきた（例えば木下1990、西原1990、入部1998など）。本名(1989)も、日本人及び日本語学習者に対する文の配列の実験から、日本人の場合は文章表現法について「一定の規範意識が確立していないながらも遠回しの表現パターンを好む傾向にある」ことを明らかにした。そして本名はその結果から、明確な説明や意見が述べられるようになるための言語技術の訓練が日本人には必要であると述べている。

本名も指摘したような日本語による論理的な文章の書き方、特に論理を明快に伝えるための文章構造の重要性については、木下(1990)をはじめとして、樺島(1999)、井上(1998)、野矢(1997)など多くの人々から指摘され、それに関する具体的な提案もされている。筆者もまた、そうした主張や提案に学びながら、留学生へのアカデミック・ライティングの教育内容の検討や実際の指導に取り組んできた。筆者が対象とする中国、韓国からの留学生は、日本人の学生と同じように、母国でも論理的な文章を書く訓練はほとんど受けてきていない。大学での学習を進めるために、論理を組み立てる過程も含めた文章表現力の習得は大きな課題となっている。また指導にあたっては、先に指摘されているような母語での修辞構造の影響をも考慮する必要がある。

これまでの日本語学習者の文章構造に関する研究としては、杉田(1994)、木戸(2001)、佐々木(2001)などがある。杉田は本名と同じような手法で、日本人の好む話題の展開のタイプを取り出している。木戸は留学生と日本人学生の意見文の「統括型」の比較から、留学生への指導において、書く前の論点の明確化や特定の文章の構造に必要な接続表現の指導の必要性について言及している。また佐々木は、本稿で筆者が利用したものと同じ母語別作文データベースを使用し、日本人学生と中国人日本語学習者の意見文の

「意見や立場を表す文」の初出位置から両者の文章構成のパターンを調べている。佐々木の分析では、日本人学生の場合の94%が演繹型の論理展開で書かれているが中国人日本語学習者については特徴的なパターンは確認できなかったという。[注1]　本稿では、佐々木とは異なる分析の方法で、日本人学生、中国人及び韓国人の日本語学習者の意見文における文章構造を比較検討した。その結果、従来日本人の典型的な表現パターンとされてきた帰納型の論理展開が、日本人学生には少なく、日本語学習者、特に韓国人学習者に多く、また、段落の構成については日本人、日本語学習者双方にそれぞれ異なる問題があることが明らかになった。本稿では第３章で調査の報告と考察を行い、第４章で日本語における段落について検討し、第５章で本稿での調査の結果から得たアカデミック・ライティング指導への課題をまとめたい。

２　調査の目的及び分析の方法

2.1　調査の目的

日本人学生、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者の意見文の文章構造を比較し、共通点や特徴を明らかにする。またそれぞれの意見文に見られる文章構造上の問題点を明らかにする。

2.2　調査資料

本調査では国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver.2」を利用する。同データベースより日本人学生（以下JP）及び中国人日本語学習者（以下CN）・韓国人日本語学習者（以下KR）が書いた「喫煙についての規制」に関する日本語の意見文、各43編、合計 129編を分析の対象とした。人数を43人に限ったのは、最も収録数の少ないCNの学生数に合わせたためで、JP、KRについてはデータベース収録順に43人分を採用した。本研究で分析する作文データベースの「課題２」は以下の通りである。

＜日本人向け＞

以下の課題からひとつを選び、日本語で 800字程度の作文を書いてください。日本の事情をよく知らない国外の人びとに読んでもらうつもりで書いてください。（以下、課題２のみ）

喫煙を規制するかどうかには賛否両論があります。喫煙は百害あって一利ないものであるから、公共の場所でたばこをすえないよう法律で規制すべきだ、またたばこのコマーシャルは子　どもに悪影響を与えるから、テレビ等での放送も厳しく制限すべきだ、という意見がある一方、　喫煙者にも喫煙の権利があるはずだから、規則で一律に禁止するのは不当であるという意見も　あります。この件に関するあなた自身の考えを、規制反対か賛成か必ずどちらかの立場に立ったうえで、日本語で論じてください。

＜学習者向け（原文は振り仮名つき）＞

次の文を読んで、自分の意見を８００字くらいの日本語で書いてください。（この作文は日　本人の学生や大学の先生が読みます）。

今、日本ではたばこのことが問題になっています。ある人は言います。「会社やレストラン、　バスや電車など公共の場所でたばこをすえないよう規則を作るべきだ。また、たばこのコマーシャルは子どもに悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ」。

一方、次のように言う人もいます。「規則を作って禁止するのはおかしい。だれもたばこを吸う権利はあるはずだ」。

あなたはどのように思いますか。たばこについてあなたの意見を書いてください。

3.1.3　分析の方法

資料とした129 編の意見文を対象として、次の1)、2)について調べ比較検討を行った。

1)論理展開の型

a.「問題提起」「意見」「実証」の３つの要素の配列状況による論理展開の型　b.「意見」と「実証」の順序の違い

2)段落の分け方

a.　段落数

以下、1)の論理展開の型の分析の方法について説明する。日本語の文章の構成を把握する方法として「統括」のタイプによる分類の方法が用いられている。「統括」とは文章の内容を括りまとめる機能のことで、その統括機能を持つ部分が文章や段落の中のどこにあるかによって、文章を「頭括型」「中括型」「尾括型」「双括型」などに類別する（市川1987）。また、メーナード(1997)は、意見文の中で意見が述べられている段落の位置を百分率で表し、その数字によって「演繹型」、「機能型」というように文章のタイプを分類している。一方、文章展開のタイプによって分類する方法もある。長野(1992)は、意見文・論説文の論理展開の型の例として (a)問題提起－資料（実証）－結論、 (b)主張－実証（資料）－結論確認、 (c)具体的事例－問題点指摘－資料補足－結論、 (d)定義的解説－具体的事例－発展的考察－主張、などの６つの型を提示している。

本稿では上の長野の提案を参考に、意見文中の「問題提起」「意見」「実証」の要素に着目し、その配列の状況を調べた。ここで「実証」とは意見の理由にあたる部分だがテーマに関する状況の説明、具体的な事例の部分も広い意味で「実証」に含まれることとした。また今回の意見文のには段落分けがされていなかったり段落分けに問題のあるものも多いことから、この三つの要素の配列は段落分けとは関係なく、いくつかの段落にまたがっていても、また段落の中の一部でもそれぞれの要素の配列のみに着目して分類した。例えば、初めの段落に問題提起と意見の二つがあれば、それはそのまま「問題提起－意見」というような展開として数えた。ただし、「問題提起」と「実証」との区別が微妙なものも含まれており、具体的な数字については判定者によって多少の幅が出るであろうことを断っておきたい。

３　調査結果と考察

3.1　論理展開の型と文章構造

3.1.1　論理展開の型の比較

対象とした129 編の意見文について、「問題提起」「意見」「実証」の３つの要素の配列を調べた結果、主なタイプとして次の a～f の６種類に分類できた。JP、CN、KRの各43編の内訳は表1 の通りである。表内の網かけ部分は意見の位置を示している。

表 1

論理展開の型	JP	CN	KR
a.意見－実証－意見（結論）	26	4	8
b.意見－実証	4	0	0
c.問題提起－意見－実証	0	3	0

d.問題提起－意見－実証－意見（結論）	3 3	9 15	3 16
e.問題提起－実証－意見	3	4	9
f.実証－意見	4	8	7
g.その他			
合計	43	43	43

問題提起には問題を提示したもののほかに、「私は韓国人だから、韓国の状況と比べて述べますKR005)」というように、意見の述べ方を書いたものも含めた。なお、構成が明確に判別できないもの、意見が明示されていないもの、意見が３か所以上に分散して書かれているものなどは「その他」に入れた。今回の意見文では課題に例示された「喫煙の規制」「煙草のコマーシャル」のそれぞれについて意見を述べようとしたために、二つの意見文をつないだような形になってしまったものも複数あり、それも「その他」に入れた。

論理展開の型について言えば、JPは「意見－実証－結論（意見）」というように最初と最後で意見を述べるタイプが全体の約６割を占めている。一方、CN、KRの場合は「問題提起－実証－意見（結論）」というタイプが最も多かった。またCNとKRを比較すると、CNの場合は問題提起から入る場合が多く、KRの場合は自分や家族、友人などの身近な状況を述べて、そこから問題点や意見の根拠を引き出すという展開の仕方が多かった。

また、「その他」を除き、意見とその理由のどちらを先に提示しているかに着目してその数を調べると、表2 のようになる。JPの39人のうち33人が意見を先に出しており、CNでは理由を先に書いたものがやや上回り、KRではJPと逆に38人のうち25人が理由を先に述べている。

表 2

	JP	CN	KR
意見を先に提示	33	16	13
理由を先に提示	6	19	25

今回の結果では、従来から日本人の文章の典型とされてきた最後に意見を述べる「帰納型」の意見文がJPに少なく、CNやKRに多かった。CNやKRも日本人と共通する表現パターンを持っていることを示しているといえるだろう。

JPに関しては、従来指摘されてきたこととは異なる結果になっている。この点について佐々木(2001)は、調査後に被験者となった学生を含む日本人学生へのインタビューの結果も参考にして、学生が、自分の意見や立場を最初に述べることが論理的な文章には重要であることを意識していると指摘している。またそうした考え方が学生を対象とした文章読本で説かれていることやメール交換による文章の構成の影響などが指摘されている。以上の佐々木が挙げた説明以外に、天満(1990)の指摘するような英語のライティング教育の影響も考えられる。今回の調査のみで日本人学生の全体的な傾向を判断することはできないが、大変興味深い結果であるといえる。

ただし、佐々木も指摘しているように、上述したJPとそれ以外のCN、KRとの違いには、課題の出し方も影響していると考えられる。先に示した課題文では、日本人向けでは、「規制反対か賛成か必ずどちらかの立場に立ったうえで」論じることを求めている。そのため、最初に立場を明らかにする必要があり、そ

の関係で、文章の最初の部分に自分の意見を述べる者が多くなったということも考えられる。一方、外国人向けには「たばこについてあなたの意見を書いてください」とのみ書かれており、賛成か反対かの立場に立った上で論じるということを明確に求めているわけではない。その違いが意見文の展開のしかたに影響を与えた可能性はある。作文指導においては課題の出し方も重要であるということを改めて示しているとも言える。

3.1.2　論理展開の型の違いによる文章例の検討

以下、先の表1 の a～f のうち主なタイプの実例について検討する。以下はすべて原文のままで、文章中の段落番号や下線は筆者が本稿での説明のためにつけたものである。

(1)　意見－実証－意見（結論）［日本人学生］

①私は喫煙を規制することに賛成です。大きな理由としては２つあります。

②一つめに、喫煙者のガンになり死亡する率が喫煙者に比べて圧倒的に高いということがあげ　られます。これは喫煙者本人にとってのデメリットですが、それに加えて家庭に喫煙者がいる　だけで家族のガン死亡率は数倍にあがります。なぜかというとタバコの煙には大量のガン誘発　物質が含まれていて、それはとなりでタバコを６本吸われると自分で１本吸ったと同じだけの　影響があると言われているほどです。これは喫煙者本人のみの問題ではなく、まったく関係の　ない人間までもおとしいれる深刻な問題です。

③二つめに、子どもへの影響があげられます。タバコの煙が子どもの身体的成長をたまたげる　ことはもちろん、子ども自身が自ら大人の悪影響をうけ吸ってしまう危険性があります。テレ　ビドラマなどでタバコを吸うことが格好良いように描かれることは、子どもがマネをする可能　性があるのでとても危険です。タバコを子どもが吸うことは身体的成長を止める他、脳への悪　影響が少なからずあります。

④喫煙者にも権利があり、規制で一律に禁止することは不当であるという意見もありますが、　私が提示したい意見はすべてのタバコをこの国からなくす、ということではなく節度を守り、　他人に迷惑をかけないという人間として最低限のルールを守ろうということなのです。個人が　自分で決めて喫煙することは一向に構わないが、他人をまきこむようなことだけはさけてほし　いと思います。全面禁止ではなく規制。喫煙者の権利と非喫煙者の権利を守るために規制は必　要だと私は考えます。

⑤以上の理由をもって私は喫煙の規制に賛成します。(JP001)

(2)　意見－実証－意見（結論）［中国人日本語学習者］

①私は「公共の場所ではたばこを吸えないよう規則を作るべきだ」という意見に賛成する。たばこを吸うについての問題は、ただ吸う人だけではなくて、みんなに関わる問題だと思う。賛　成の理由は次に述べさせていただく。

②まず、たばこは体に悪いというのはみんな分かるはずだと思う。たばこを吸うのはいろいろ　な病気のもとだとよく言われている。それに、たばこの煙は流れによって広がるから、たばこ　を吸う人だけではなくて、周りの人もその空気を吸ってしまう。しかも、たばこの煙が人の体　に対する影響について、吸う人自身より吸わない人の方が何倍以上も高いと新聞で見たことが　ある。また、たばこの匂いに慣れない、あるいは匂うと気持ちが悪くなる人も多いだと思う。　③「だれにでもたばこを吸う権利がある」だということは当然だが、たばこの影響を拒否する　権利もだれにもあるだと思う。私にとって、日本に

来てから、たばこのことが一つ困る問題が　ある。レストランへ行くと、禁煙席と喫煙席との区別がない、あるいは同じ場所でただ一つの　空気を吸いながら食事をすると、いくらおいしい料理でもおいしくと思わない、ただ早く食事　を終わって、レストラを離れると考えている。

④たばこの問題は吸う人だけの問題ではない、あらゆる人の問題だと思う。たばこを吸うこと　はよく考えると、いいことは一つもない、思い出せるのはほとんどよくない影響である。アメ　リカやカナダのような先進国でもたばこを吸う人もいるが、吸わない人のために公共の場所で　きちんと規則を作っていると聞いたことがある。みんなにとって生活しやすい環境を作るため　に、公共の場所でたばこを吸えないよう規則を作るべきだ」と私は強く賛成する。(CN003)

上の二つの意見文は、「意見－理由の説明－予想される反対意見への反論－結論（意見）」の順で展開されている。反対意見にも言及しており説得力のある意見文となっている。またどちらも意見が最初に示されており、文章全体の構造も明確である。段落内においても、段落の中心的な内容を示す中心文が最初に示されている部分が多く（ａの全段落、ｂの①、③）、それぞれの段落の内容が把握しやすい。

またこの二つの意見文では、波線の部分のように、論理的な関係を示す接続表現や、文章構造を示すメタ言語表現[注2]が効果的に使われており、それが論理展開をより明確に示す役割を果たしている。例えば(1) の文章では、最初に「大きな理由は２つあります」と述べ、その後「一つめに」、「二つめに」とそれぞれの段落の冒頭で受け、最後の段落で「以上の理由をもって」と結論部分を示している。また、第４段落の反証の部分では、「～という意見もありますが」「私が提示したい意見は～ということなのです」というように異なる立場の意見をとりあげ、それについて反論している。また(2) の文章では、やはり最初の段落で「賛成の理由は次に述べさせていただく」と予告し、次の理由を述べる段落では、「まず」「それに」「しかも」「また」というように論理的な関係（この場合は列挙）を示す接続詞を効果的に使っている。そしてやはり第３段落で、「～ということは当然だが」と、異なる意見をとりあげ反証を行っている。論理的な文章を書くためには論理的な構成と同時に組み立てた論理を明快に示す言語表現が重要であることをこの二つの例は示している。

(3)　問題提起－意見－実証［中国人日本語学習者］　①たばこの問題について、いろいろと意見がある。その中には二つの大別がある。第一、たば　こを吸うことが個人の自由と権利で、他人と関係がないと言われる。第二、たばこは身に悪　い影響があって、出来るだけ吸わなくて、たばこを吸ってもたばこのマナーを守りべきだ。　②私として上の第二の意見を賛成する。いまもテレビの番組の中にときどきたばこの広告があ　る。しかも一部分の建物の上にたばこの看板もある。こうして子供に小さいときからたばこが　怖いものを考えられる。べつにたばこは環境に悪い影響があった。吸殻が勝手に投げて、汚染　を生じた。たばこを吸うことは国と個人の財産の浪費を生じた。例えば中国では毎年のたばこ　の輸入のせいは何億元を浪費してしまたこの金を学校の施設を増しいけば、貧しいで学校に入　られない子供はだんだん少なくになろうと思う。たばこを吸うことは個人に悪い影響を与える　とはいろいろなたばこに関する病気になる。いま、世界でたばこによって死んだ人がずっと増　える。この現象は世界の各国の人人に一つの合図をして、それは全世界がいっしょに禁煙の行動を開こう。（略）(CN010)

CNの意見文には、このように最初の段落で問題を提起し、次の段落のはじめに意見を述べると言うタイプのものが比較的多い。(3) の文章の問題提起の部分は、たばこの問題について自分なりに整理をしたう

えで意見を述べようとしている。表現に一部問題があるものの、このように初めに問題を整理したうえで提起するということも、意見の述べ方として重要な技術である。またこの文章では問題提起に続いて、次の段落の冒頭ですぐ意見を提示しており、意見文として分かりやすい構成になっている。だが、その後の理由の部分は、根拠に挙げた項目ごとの区切りが曖昧で、思い付くままに羅列しているという印象を与えてしまっている。

次に、状況の説明や理由にあたる部分の後で意見を述べている例について見てみる。

(4)　実証－意見　［韓国人日本語学習者］

①現在、アメリカの放送を見るとすぐわかるのは、たばこの禁止のコマーシャルです。このコ　マーシャルは種類のいろいろなアイデアで作ったので、視聴者の視線を引かせるように作られ　ています。

②それではどうしてこんなコマーシャルを作って放送していますか？これはアメリカの政府が　たばこの弊害をよく知っているわけです。だから、今、アメリカは多くのマス・メディアを利　用してたばこの弊害を告げています。

③さて、たばこの弊害というなんて、何のことでしょうか？癌と障害児の出産などいろいろで　す。たばこのため、自分の人生がこぼれてしまって苦しがる人々が増えていきます。これは、　ただ、個人の問題ではないので、国家の問題になりました。いくら民主主義国家として自由が　尊重されていてもたばこの悪影響が自由の尊重という言葉になることはできないものです。

④今からも、たばこの禁止の場所を広げ出して、テレビでたばこの弊害を効果的にこうこくし　なければならないと思います。(KR013)

(5)　実証－意見　［韓国人日本語学習者］

①私はたばこを吸いません。その理由は、健康のためでもありますが、それよりもっとの理由　はたばこの煙と服とか髪につくたばこのにおいが嫌いだからです。たばこを吸わない人はだい　たい私と同じ考えだと思います。それで、わたしはまわりの人がたばこを吸うのも少し気にい　らないので、なるべくなら私の前で吸わないことをお願いします。一緒にいる人がたばこを吸　うと、私は吸わなかったのにたばこのにおいがついて不愉快になるからです。

②誰にも人にたばこを吸ってもいいとか、吸ってはいけないとか言う権利はありません。でも、　公共の場所でたばこを吸うことはたばこを吸わない人に迷惑をかけることだと思います。たば　こは吸う本人より、まわりの人にもっと悪いそうです。吸うひとだけの問題だったら、別に何　もいえないですが、そんなに簡単なことではないので、いつも議論されていると思います。

③（略）こういう問題は、たばこを吸う人が少し気を使ってくれれば解決できることだと思い　ます。好きなたばこを続けて吸うために、まわりの人に気を配るのが重要だと思います。

(KR028)

(5)の①の段落の下線部分は意見ともとれる文であるが、筆者はこの部分は意見とは見なさな
かった。それはこの課題では「たばこの規制」についての意見を求められているので、この部分はそれに該当しないと考えたからである。今回の意見文の中には、たばこに対する自分の立場や感想だけで終わっているものが数編あった。

(4)(5)とも帰納型の意見文である。たばこについての状況から書き出し、読み手との共通理解を図りながら結論にもっていく形になっている。意見の前の部分は意見の根拠と明示していはおらず遠回しに理由

にあたることを説明して意見に繋げているという感じである。このようなタイプの文章は、書き手が考えたままを綴っていけるので書きやすく、また日本人の感覚にもなじむものであろう。しかし意見文の目的からするとどうだろうか。比較のために、最後の意見の部分を冒頭に移動し、（　）内のような表現や文を加えると次のようになる。

（たばこの問題は）たばこを吸う人が少し気を使ってくれれば解決できることだと思います。　好きなたばこを続けて吸うために、まわりの人に気を配るのが重要だと思います。

（なぜなら世の中にはたばこの臭いで困っている人もいるからです。）私自身はたばこを吸いません。その理由は、健康のためでもありますが、それよりもっとの理由はたばこの煙と服　とか髪につくたばこのにおいが嫌いだからです。たばこを吸わない人はだいたい私と同じ考え　だと思います。それで、わたしはまわりの人がたばこを吸うのも少し気にいらないので、なる　べくなら私の前で吸わないことをお願いします。（略）

（もう一つの理由はたばこが吸わない人の健康にも悪い影響があるからです。）誰にも人にたばこを吸ってもいいとか、吸ってはいけないとか言う権利はありません。でも、公共の場所　でたばこを吸うことはたばこを吸わない人に迷惑をかけることだと思います。（略）

筆者は意見文としては後者の方が望ましいと考える。その方が読み手にとって分かりやすい。読み手は、意見に続く実証の部分が意見の根拠として有効なものかを判断しながら読むことができる。一方、意見が最後に来る場合、読み手は最後まで書き手の意図を探りながら読んでいかなければならない。これは文章だけではなく、討論の場合も同じで、議論の際の効率性という点では「演繹型」の方が望ましいと考えられる。

日本人は従来、話す場合でも書く場合でも意見を最後に述べる帰納型の表現が一般的であると言われてきた。確かに書き手が考えをまとめるプロセスにおいては「帰納型」が自然であるが、そこで得た結論を相手に伝える場合、特に論理を目的とする文章においては、「演繹型」の方が効果的な表現法であろう。ただ、「演繹型」の場合は自分が得た結論を意識的に前にもってくるという操作が必要で、その意味でも文章表現の学習の中で意識して習得する必要がある。

今回の資料では、日本人学生の場合は意見の述べ方に変化が起こりつつあることが感じられた。一方、日本語学習者の場合は帰納型の言い方が多かった。それもただ状況を説明しているだけなのか、理由を述べているのか、書き手の意図が理解しにくいものも少なくなかった。文章表現の指導にあたっては、今後演繹型の意見の述べ方もできるように練習する必要があるだろう。[注3]また、意見文に限らず説明を目的とする文章においても、文章の目的や主題を最初の部分で述べる「重点先行」の書き方が求められる。そのためにも書く前の十分な準備が必要である。書く前に自分の考えを整理し、一定の結論をもった上で、構成に配慮しながら書くという書き方を習得する必要がある。

なお、今回資料とした意見文における他の問題点としては、1)意見が文中に示されていない、また、状況を述べているだけで意見やその理由にあたる部分がない、2)内容が未整理のまま書かれている、また、途中で話題がそれてしまっている、3)エッセイ的な文章で意見文になっていない、などであった。これらの問題は筆者が対象とする留学生の意見文にも共通する問題である。日本人の学生も含め、意見文を書く、あるいは人の前で自分の意見を説明するという経験自体が乏しいこともその要因であると考えられる。今後の指導については第５章で改めて述べたい。

3.2.　段落の分け方

3.2.1　段落分けの状況

論理的な文章を書く上で段落の作り方も重要である。下の表3 はJP、CN、KRの意見文の段落数を調べた結果である。表の中の数字はそれぞれの段落数に該当する意見文の数である。

表3

段落数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	合計
JP(日本人)	11	8	9	11	4	0	0	0	0	0	43
CN(中国人)	2	3	7	11	8	5	6	1	0	0	43
KR(韓国人)	4	5	8	8	8	2	3	2	2	1	43

一般に一つの段落の長さは 250～300 字程度が適当だと言われている。今回の意見文は合計　800字の文章で、意見文としての構成を考えても３～５段落が妥当なところであろう。表3 の網かけ部分がその範囲を示している。表3 で１段落というのは、段落分けが行われていないということである。また全体で８～９段落ということは、一つの段落当たり１～３文で構成されておりかなり細切れに段落分けがされていることになる。なお、「その他」は文章が一文ずつ羅列されていたものである。

上の表のように、JPの場合は約４分の１が段落分けのない文章であった。２段落のものも多い。また段落分けのない11編の意見文のうち７編は、内容の展開にも問題があった。一方、CN、KRの文章のなかに７段落以上のものがそれぞれ７人（16.3%）ずつある。段落で文章の切れ目が示されると、読み手はその限定された範囲で中心的な内容を確認しながら次の段落に進むことができる。しかし、後に例を示すように段落分けがない場合、文章の構造が把握できず、読み手は一文一文辿りながら読み進めていかなければならない。 800字程度の長さの文章が段落の切れ目なしに続くと読み手はかなり緊張を強いられる。逆に、必要以上に段落が分けられている場合も、同じように構造が把握しにくく、読み手は細切れに示される内容を自分でまとまりを作りながら読み進めていかなければならない。

今回の調査で段落の分け方にかなり差があることがわかった。論理的な文章においては、段落は書き手の論理展開を示す重要な役割を持っており、書き手は明確な意図をもって段落を構成する必要がある。次節で段落分けに問題のある文章の例を挙げ、この点についてさらに検討したい。

3.3.2　段落分けに関する文章例の検討

ここで段落分けに問題のある文章の例を三つ挙げて検討する。初めの二つは段落分けがないもので、特に２番目の文章は内容面でも問題があるものである。３番目は段落分けが過剰に行われている例である。なお、文中の番号は筆者が説明のためにつけたものである。

(1)　段落分けがされていない文章［日本人学生］

□日本では喫煙者の立場が狭くなってから久しい。健康ブームなるものが日本に押し寄せて来　て以来、特にたばこに関しての風当たりが強くなってきている。喫煙スペースの設置や禁煙タ　イムの導入、もしくは常に禁煙という場所も見られるようになっている。これらは非喫煙者に　とっては非常に有り難い話となっている。自分も非喫煙者だからこのようなことは非常に有り　難く思っている。このような場所がもっともっと増えてくれることを望んでいる。しかしこれ　らを法律で規制するということについてはどうかと思う。□喫煙は百害あって一利なしと言わ　れている。確かかにその通りだと思う。しかし、それを承知で喫煙者はたばこを吸うわけだか　らそれをやめさせる権利はだれにもないはずである。又、たばこ会社があるということはそこ　には社員がいる。社員がいるということは給料を支払わなければならな

い。給料を払うには売　り上げを伸ばさなくてはならない。売り上げが落ちてしまうと給料が払えなくなる。人の生活　がかかっているいじょうコマーシャルをやっても売り上げを伸ばさなくてはならない理由があ　るのである。それを非喫煙者が健康ブームにのって喫煙者を弾圧しているのはおかしくはない　だろうか。□今の世の中は喫煙者にとっては喫煙の権利を奪われているのである。どちらかの　権利を主張すればもう一方は必ず権利を奪われるということを考えなければならない。つまり、　非喫煙者の規制の主張は喫煙者の権利を奪いとっているのではないか。つまり非喫煙者はこれ　以上規制については言うべきではないと思う。[JP009]

上の(1) の意見文を各部分の内容から番号のところで分けると、□問題提起及び意見、□根拠、□結論、というように構造が見えて分かりやすくなる。それほど長い文章ではないが、読み手に論理の展開を明確に示すためには段落分けが必要である。

(2)　段落分けがされていない文章［中国人日本語学習者］

私はタバコを吸わない。そして喫煙も反対である。最近、喫煙マナーも厳しくなってきており、愛煙家の人は肩身の狭い思いをしている事だろう。私の身近に愛煙家は居る。父親、先輩、　友達や駅のホームでも愛煙家を見ることができる。規制が厳しくなったからといって喫煙者が　減ったりすることは無さそうに感じる。私がタバコに関して一番疑問に思うのは、自動販売機　の設置だ。未成年の喫煙を止めるためには、自動販売機の撤去を最初にするべきだろうと思う。　現在は高校の制服を着たまま自動販売機でタバコが買えるのだから、法律と現状が矛盾してい　るのではないだろうか。最近のＣＭでは“タバコを括弧良く、もしくはマナーを守って吸う”　点が強調されていると感じる。ＣＭやポスターに一瞬タバコの宣伝とはわからないようなもの　もあり、タバコそのものよりも、喫煙をする“かっこよさ”を売り物にしてきていると思って　しまう。テレビ等の影響が必ずあるとは言い切れないけれど、喫煙の姿に、あこがれを持たせ　るのはテレビ等の情報メディアだろう。また喫煙者の喫煙権利を主張する意見もあるが、喫煙　は周囲の人にも影響を及ぼす。喫煙者の周囲の安全は考えなくて良いのだろうか。小さい子供　の真横で大人が何人も喫煙している光景は、日常的に見られる。しかしここまで絶対反対の立　場をしている私だが、父の喫煙は止められない。父は私が小さい頃から、喫煙しているし、量　も多い。私は喫煙には反対だが、父の喫煙を止められていない。ここは、自分でも矛盾してい　る点だと感じてしまう。法律で規制されたら、少しは良くなるだろうか。私は法律で規制され　ても喫煙が減少するとは思えない。なぜなら、喫煙をする事は、すでに喫煙者の個性になって　しまっていると思うからだ。規制で個性を無くす事はできないだろう。[CN011]

この文章は段落分けがされておらず、また内容の展開にも問題がある。文章の始めの方で「規制が厳しくなったからといって喫煙者が減ったりすることは無さそうに感じる」という問題提起と見られる部分のあと、関連した事柄への説明が広がってしまい、筆者の意図が途中で見えなくなる。読み手は最初の主題提示と取った部分は主題の提示ではなく、単なる導入で、「規制は難しいけれどもやらなければならない」という意見が中間か後半に出てくるのかもしれないということも予測しながら読みすすめることになる。しかし、最後はやはり最初の問題提起に戻って筆者の意見が述べられる。意見が前に述べられてはいても、中間の部分がその根拠からはずれてしまったために、最後まで読まないと本当は何を言いたいのかわからない。段落分けがなく内容も整理が不十分なために分かりにくい文章になってしまった。

留学生の書く文章の中には、このように段落分けも含めて文章の構成が不十分な文章が少なくない。一つの段落に一つの内容というルールで、文章がいくつの部分（段落）から成るのか、その部分をどのように並べるのかというように、全体の構造を意識しながら文章を書く習慣をつける必要があるだろう。次に段落が細かく分かれ過ぎてる文章の例を見てみる。

(3)　段落分けが過剰に行われている文章［韓国人日本語学習者］　　＊丸数字は筆者　　①タバコは嗜好品だとよく言われています。タバコを吸うか吸わないかは自分が決めることで　す。

②しかし、タバコを吸うと、煙が立ちます。この煙は人に不愉快な気持ちをさせることがある　かもしれません。

③私の場合、タバコを吸わないだけでなく、他人の吸うタバコのにおいをかぐのも本当に大嫌　いです。気分が悪くなるし頭が痛くなります。タバコを吸わない人はたぶんその大多数がタバ　コのにおいや煙をいやがるだろうと思います。

④それに、タバコを吸う人はもちろん、その時、一緒にいる人の健康にもたいへんよくないそ　うです。

⑤このような問題のため、タバコを吸うには規制が必要です。汽車やレストランなどには喫煙　席が別になっていたり、多くのオフィスや電車などの公共施設では禁じられていたりします。　また、だんだん喫煙の場所は増えています。タバコを楽しんでいる人にはちょっと気の毒なこ　とですが、他の多くの人に迷惑をかけないようにすべきだと思っています。

⑥しかし、健康にも良くないこのタバコの消費量がだんだん増えているそうです。どういうこ　とか、男性の方はやや減ってきたというのに、女性、特に若い女性の方は、だんだん喫煙人口　が増えているそうです。

⑦自分の健康に悪いのはいうまでもなく、もし妊娠したら、奇形児を産む確率もかなり高いと　いうのにもかかわらず、女性喫煙人口が増加することは好ましくない現象です。その危険性が　あまり認識されていないのも理由の一つになるでしょう。

⑧広報活動が重要だと思います。よく知らない人も少なくないと思います。特に青少年にタバ　コのもたらす被害についてよく知らせる広報活動はもっと活発にならなければならないと思い　ます。［KR025］

上のように、段落分けが過剰になされている場合も論理展開が分かりにくい。この文章の場合は、以下のように段落をまとめることで、文章の構造が明確になり内容が把握しやすくなる。

理由説明（①②③④）→意見1 とその説明（⑤）→状況と理由説明（⑥⑦）→意見2(⑧)

または、　　導入（□）→理由説明（②③④）→以下、上と同じ

以上、段落分けに問題のある文章の例を見た。ここで取り上げた(1) と(3) の場合は、段落分けが適切に行われていれば、より分かりやすい文章になったという例である。(1) の意見文のように、日本語力が十分あると思われる学習者の場合でも、段落の構成については不十分な面がある。また(2) の意見文の場合は、段落分けだけの問題ではなく考えをまとめる過程の問題もあった。JPの意見文の中にも、(2) と同じような問題を持つ意見文が少なくない。今後、段落分けも含めて文章構成についての指導が必要であろ

う。

また、CN、KRに細切れの段落が多い理由としては、日本語力の問題も関係していると推察される。日本語の語彙や文型が不十分なため、文中で取り上げた論点をさらに詳しく表現できず短い段落のまま次の論点に移ってしまうこともあるのではないかと推察される。

今回の資料では、日本人学生、日本語学習者ともに、段落分けに問題がある例が多かった。次章では、日本語において段落がどのように捉えられてきたのか、また、アカデミック・ライティングにおける段落指導の方法についても検討したい。

４．日本語の文章表現のための文章論の必要性ーー特に段落をめぐって

日本語の段落はこれまで主に読み手の立場から文章理解の上で問題にされることが多かった。しかし、前章で検討してきたように、論理を目的とする文章を明快に筋道を立てて書くためにも、段落の役割は重要である。ここでは日本語において段落がどのようにとらえられてきたかを簡単に整理し、論理的な文章における段落の機能と、その機能を生かした文章作成の指導の重要性について述べたい。

段落とは一般的に「文章を構成する部分として区分され、それぞれ小主題をもって統一されている文集合」（市川 1978)と定義される。しかし実際の文章においては、段落の区切りを示す改行がそれぞれの書き手の個人的な感覚で行われていたり、文章によっては改行による切れ目と内容面での切れ目と必ずしも一致しない場合もあることなどから、形式的な段落と内容的な段落の二つの区分が用いられてきた。前者は改行による形式的な区切りによるもので、「形式段落」「小段落」「修辞的段落」などと呼ばれる。後者は内容の面からいくつかの部分をまとめたもので「意味段落」「大段落」「論理的段落」「文段」などと呼ばれる（長野 1992 p.26）。例えば市川(1978)は、改行は本来恣意的な面をもっており、段落の区分のしかたは絶対的なものではないとし、従来の段落とは別に、内容的なまとまりのある部分を「文段」と呼ぶことを提案している。[注4]　この二つの区分のうち、これまで文章理解のために重要だと見なされてきたのは、現実の文章に客観的に存在する段落よりも、読み手が文章を読む過程で設定する「文段」や「意味段落」の方であった。

このように日本語の段落は、文章の単位として未だに明確な形で定着してはいない。前章で検討した意見文のように、同じ日本人が書く論理的な文章においても書き手によって段落の分け方に大きな違いがある。また一般向けの学術的な本や雑誌でも改行が頻繁に行われているものもあれば、内容のまとまりと一致するように配慮して段落を分けているものもあるといった状態で、外国人学習者の中には日本語には段落についてのルールが確立していないという印象を持つ者もいる。

これは、日本語において段落がかなり新しい概念であるという事情とも関係があると思われる。国語教育辞典によれば、日本語の文章にはもともと句読段落の表示はなく、ただ連綿と文字が書き連ねられており、読み手が各自の解釈によって意味の切れ目を認定していたのだという。そして理解表示であった段落表示が表現手法の一つとなったのは、明治以降欧米の「パラグラフ」の概念が導入されてからのことで、さらに現行の段落表示が定着したのは国語教育における段落指導の普及が大きかったようである。

しかし、その段落は英語の「パラグラフ」とは大きな違いがあった。以下の林(1959)の述懐はその辺りの状況を具体的に示している。

（段落とパラグラフの違いについて）少なくとも私は、「段落」を「段落に切る」というように使って、読解の際の受け身の作業に結びつけて考えていた。長い文章がある。これを段落　にわければいくつの段落になるか、どことどこで分けるか、という課題に悩まされ、慣らされ　た結果、段落と

は長いものが細切れにされたものだと考えるようになった。だから段落が問題　になるのは、教科書にのっているような、えらい人の書いた文章についてであって、自分が　　「作文」する文章に段落があろうなどとは考えてもみなかった。それを問題にされたこともな　かった。（林四郎「文章の構成」『言語生活』1959年６月号、市川(1978)より）

林は上の部分に続いて日本語の段落と英語のパラグラフを比較し、パラグラフは日本語の段落のように「読み取りの過程」で浮かび上がってくるのではなく、「組み上げの過程」で問題になるものであると指摘している。このことから、形の上では一段落と一パラグラフとが一致することは多いだろうが、それらの語の意味はやはり違っており、その違いは言語教育の違い、ひいては「もっと深いところ」にその原因があるだろうと述べている。林が述べているように、日本語では段落は文章理解において問題にされるものであり、言い換えれば、日本語では書き手に内容のまとまりを明示することを求めるより、読み手の側が自分自身で内容のまとまりを考えながら読むことの方を求めてきたと言えるであろう。

40年前の林の指摘は現在でも大きな意味を持っている。第１章でも述べたように、近年、日本語の実用文や論理的な文章の書き方に対して積極的な提案が行われるようになり、論理的な文章における段落の重要性も強調されている。例えば樺島(1999)は、段落は本来文章を書くときのまとまりであるとし、「よく作られた段落は、その長さは一定ではないが、一つの要旨にまとめることができる、まとまった内容を持つものでなければならない」と段落の形式と内容の一致を重視する（同 1999 P.59）。また、言語技術の会(1990)は段落を「ある話題についての書き手の考えを明確・簡潔に整理して表すための基本的単位（p.55）」と定義し、論説文や説明文では段落を「段落話題と中心文とを意識しながら書くことが、読みやすく分かりやすい文章を書くために、ぜひとも必要である（p.57）」と論理的な文章における段落の書き方を示している。

筆者も、論理的な文章においては、改行と言う目にみえる形態を有効に生かし、そこに内容のまとまりを一致させるように段落を構成すべきであると考える。一つは読み手に明快に内容を伝えるため、もう一つは書き手が自分の考えを組み立てる手掛かりとして。書き手は明確な意思をもって、書き手の論理展開を読み手に伝えられるように段落を構成しなければならない。書き手の提示した段落がそのまま読み手のスムーズな文章理解を導くような、そうした段落を作らなければならない。また一方、段落は書き手が自らの論理を組み立てる上での手掛かりとしても有効に活用されるべきものなのである。このような考えのもとに、文章表現の指導においては段落を重視する必要がある。なお、本稿では段落内の構成については触れることができなかった。これについては別な機会に検討したい。

５．アカデミック・ライティング教育への示唆

本稿では、日本人学生と日本語学習者の意見文の分析を通して、それぞれの文章構造の特徴や問題点を明らかにし、日本語の論理的な文章の指導に関しても意見を述べてきた。最後に、これまで検討したことをもとに、今後のアカデミック・ライティング教育の課題をまとめておきたい。

1）日本語の論理的な文章のあり方への共通理解の形成

アカデミック・ライティングで目指すべき文章とはどのようなものであろうか。実際の文章の観察を通して今後も明らかにしていかなければならない。今回は意見文を検討の対象としたが、明快で分かりやすい文章を書くためには、3.1 で述べたような「演繹型」の文章のような重点先行の書き方の習得、3.2 で述べた段落の問題も含む文章の構造の意識化などが主な課題になるであろう。前者においては、最初に文章の目的や、主題を書くこと、各段落内においても中心文をできるだけ前にもってくること、また、内容

を的確に現すようなタイトル、章や節の小題をつけることなどがその内容として考えられる。後者については、文章全体の構造の意識化、適切な段落分けなどがその内容となるであろう。また、論理展開を示す接続表現や文章の構造を示すメタ言語の効果的な使用も重要である。そのためには教師の側においても、日本語の論理的な文章における接続表現やメタ言語の洗い出しも含めて、目指すべき文章のありかたについて共通理解を形成していく必要がある。

2）書く前の論理的な思考の方法

書く前に自分の考えを整理することの重要性を学生に理解させる必要がある。3.2 の意見文の例にあったように、自分の行きつもどりつの思考過程をそのまま文章にするのではなく（入部、 1998)、事前に考えを整理し、読み手に立場に立って再構成したうえで一つの文章として完成させるというプロセスを習得させる必要がある。学生にそうしたプロセスを踏ませるためには、ただ書く前に考えろと指示してもあまり効果はない。主題を絞り込み、文章構成のプランを練るための具体的な方法を提示し、そのプロセスを実際に繰り返し経験させることが必要である。

こうした方法の一つとして、例えば樺島(1983)では書く前に考えを整理するために以下のようなチェックリスト（「ワク組システム」）を提案している。

①何について（事実、出来事、問題、対象……）　②何を（本質、仕組み、機能、構造、歴史、意見、感想……）

③読み手に対してどのような効果をねらって（分かりやすく、興味・期待を持たせて、納得するように、知識をもたせるために……）　④どうする（解説、報告、主張、解明、説得する……）

上記の項目の組合わせから、書こうとする意図・内容に最も適した枠組みを選択させる。樺島はこうした手掛かりを利用することにより、書いている途中でも構造を常に考えながら書くようになるという。このような論理的な思考のための具体的な方法を今後も考えていく必要がある。

3）作文課題での文章構成の枠組みの提示

文章構造や段落の意識化のために、目的の明確な短い文章の作成において、文章全体の構造や段落数などを予め指定した文章を書く練習も有効であると考える。例えば、意見文の場合、「問題提起－意見－その根拠－結論（意見の確認）」、組織や機構について説明する文章なら「その組織の概要－歴史的経過－現在の課題」というように、論理展開の方法を示した上でそれに沿って段落数を予め設定して書くようにさせる。これは学生の文章を一つの型にはめることを目的とするのではない。こうした経験を通して、学生が文章全体の構成や段落分けを意識し、自分自身でこうした書く前の作業ができるようになることを目的としたものである。またこうした枠組みを効果的に提示するためには、教師の側も様々な論理展開の型を実際の文章から抽出することが必要になってくる。

文章表現力の習得のためには、実際に書くという過程が不可欠である。教師からの適切な援助の下に、学習者自身が意識的に文章を書く過程を繰り返すことなくしては習得が難しい。そのためには、書くことが楽しく、書くことを通して学習者自身が自分の文章表現力の伸びを感じられるような活動にしていかなければならない。また書く過程は孤独な作業であっても、クラスでお互いの文章を読み合うことによって、書くことが意味のあるコミュニケーションとなるようにしなければならない。

本稿では意見文の分析を通して、留学生のための文章表現指導の課題について検討を行ってきた。ここで得た示唆を今後のアカデミック・ライティング教育に生かしていきたいと考える。

注

1. 佐々木(2000)の場合は、意見文の「立場や意見を表す部分」に着目しているが、筆者の調査　では「私はタバコが嫌いです」というような本人の立場を表す部分は意見には入れていない。　そのため、佐々木より低い数字になっている。しかし、日本人学生のかなり多くが「演繹型」　の意見文を書いたという点では全く同じ結果である。
2. 杉戸、塚田(1991)では、メタ言語表現を「言語行動について言及し、それ自体が言語表現を　伴う言語行動」(p.133) と定義している。例えば、意見文の中で「次にその理由を説明する」　というように自分がこれから述べようとすることや、すでに述べたことについて表す表現がこれにあたる。
3. 言語技術の会(1990)には、帰納型の文章を演繹型の文章に直す練習がある。また、その他に、　ある命題を書き出しの文として与え、その命題の部分に続けてその根拠を述べる部分を自分で　考えて書くという形で、演繹型の文章の練習を設けている。
4. さらに佐久間(1992)は、市川の「文段」の考え方を踏襲しつつ、文字資料の「文段」と音声　資料の「話段」を包括するものとして新たに「段」という概念を打ち出している。また佐久間　(1997)では「「段」は主な内容を表す「中心文」と、それによってまとめられる複数の文集合　から構成される（同じ p135）」と「段」をより明確に規定している。

参　考　文　献

・Kaplan Robert B.(1966)“Cultural Thought Patterns in International Education” *Language Learning,* Vol16, 1&2, pp.1-20
・Senko k. Maynard(1998) *Principles of Japanese discourse* Cambridge University Press
・雨宮正彦(1999)「「考えないヒト」への進化」『言語』28巻３号
・井上尚美(1993)『レトリックを作文教育に活かす』国語教育ブックレット11　明治図書
・磯貝友子(1998)『アカデミック・ライティング入門－英語論文作成法－』慶応義塾大学出会
・市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
・「国際化時代に通用する論理的な文章の書き方」『日本語学』17巻 3号
・大熊徹(1994)『作文綴方教育の探求－史的視座からとらえる課題と解決－』教育出版
・大西通雄(1998)「論理的な表現力と国語教育」『日本語学』17巻 3号
・勝田順子(2001)「日英新聞記事における第１段落の機能－対照修辞論に関する一考察」『小出　記念日本語教育研究会論文集』9　凡人社
・樺島忠男(1983)「文章構造」『朝倉日本語新講座 5　運用□』朝倉書店
・樺島忠男(1999)『文章表現法　五つの法則による十の方策』角川選書
・木戸光子(2001)「作文教育のための留学生と日本人学生の意見文の比較」日本語教育学2001年　度春季大会予稿集 pp.97－102

・木下是雄（1990）『レポートの組み立て方』築摩書房
・国立国語研究所(2001)『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳とその対訳データベース』ver.2 CD-ROM版
・佐久間まゆみ(1992)「文章と文－段の文脈の統括」『日本語学』11-4 pp.41-48
・佐久間まゆみ(1995)「中心文の「段」統括機能」『日本大学紀要』44 pp.93-109
・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編(1997)『文章・談話のしくみ』おうふう
・佐々木泰子(2000)「課題に基づく意見の述べ方－日本人大学生の場合・日本語学習者の場合」代表者：宇佐美洋　文部省科学研究費研究成果報告書『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文コーパスの構築』
・杉田くに子(1994)「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴－文配列課題に現れた話題の展開」『日本語教育』第84号 pp.14-26
・杉戸清樹・塚田実千代(1991)「言語行動を説明する言語表現－専門的文章の場合」『国立国語研究所報告集』12　国立国語研究所　pp.131－163
・泉子・K・メーナード（1997）『談話分析の可能性』くろしお出版
・天満美智子(1990)「英語が日本語を変えていく」*The English Teachers Magazine* 1990年 3月　p.5
・時枝誠記(1950)『日本語文法　口語篇』岩波書店
・長野高明(1992)「文章と段落」『日本語学』11-4　pp.26-32　明治書院
・永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
・西原鈴子(1990)「日英対照修辞法」『日本語教育』第72号 PP.25-41
・二通信子・佐藤不二子(2000)『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
・野村真木夫(2000)『日本語のテキスト－関係・効果・様相』ひつじ書房
・野矢茂樹(1997)『論理トレーニング』産業図書株式会社
・橋内武（1995）『パラグラフ・ライティング入門』研究社出版
・橋内武（1999）『ディスコース　談話の織りなす世界』くろしお出版
・林四郎(1998)『文章論の基礎問題』三省堂
・本名信行(1989)「日本語の文体と英語の文体－言語使用の背景にある文化と社会－」『講座日本語と日本語教育』5 明治書院　pp.363－386

［『北海学園大学学園論集』第110号に掲載］